

家持祈雨の歌は、私注によれば「興味索然たるものと言ふべきで」「形式的なものとなった」のである。この評は、右に述べて来たこの歌詠出の動機、神々の実質的威力の後退とその背景を考える  
と首肯できるのである。さらに、

わが欲りし雨は降り来ぬかくしあらば言<sup>18</sup>、<sup>18</sup> 挙せずとも年は栄えむ

(18・四一二四)

という歌の中での「言<sup>18</sup>挙げという言葉が、神威の尊信や權威への服従に必ずしも忠実でない立場を暗示するもの」であることも考慮に入れるべきであろう。すなわち家持という敏感な一詩人の中の神々の後退と外国思想登場の劇がこの祈雨歌をとおしてうかがえるのである。そしてこの歌が文学的に空疎であると評されたとしても、家持の心の中における神々の後退は、同時に人間的な現実への直視と人生の苦への自覚をうながすという意味において仏教への接近と関連をもつであろう。そして、そこには深い人間的自覚に目覚めて行く契機があり、やがて真の抒情詩を生み出して行く過程の一段階を示すものが読みとれるのである。仏教への接近はもっと家持個人に即して考えねばならないが、与えられた紙幅を越えたので、この

## 東歌が民謡であつたら

問題については機を改めて論じたい。

注1、美貌の皇后

2、万葉私記第二部(P三三三)

3、古代日本の文芸(P三三九)

4、家持ノート(万葉集の比較文学的研究)(P四六八)

5、越中守家持の背景(語文二十六輯)

6、董仲舒研究(周漢思想の研究)重沢俊郎(P二八九)

7、董仲舒(中国哲学史)狩野直喜(P二七四)

8、古代日本文学思潮論(Ⅱ)(P二五三)

9、古代研究民俗学篇(呪詞及び祝詞)

10、日本の神道 上巻 津田左右吉(P二七)

11、続日本紀頭注(朝日新聞社版六国史)

12、13、神道史 上巻 宮地直一(P二〇、P二九)

14、古代研究(注9)(P九三)

15、神道史 上巻(P二〇)(注12、13、)・寧楽遺文 下巻

16、万葉の時代 北山茂夫(P二七)

17、古代における北陸について 志田諒一 駿台史学第9号

18、古代日本文学思潮論(Ⅳ)(P三三六)

## 一 序

東歌が民謡であつたら、例えば

3439 鈴が音の早馬駅家の堤井の水を賜へな妹が直手よ

3440 この川に朝菜洗ふ児汝も吾もよちをぞ持てるいで児賜りに

などはどんな風に口語訳してみたらよいであろうか。語句の意味が判れば、それは簡単なことなのであろうか。「水を下さいな、あなたの手から直に」「お前も私も余知を持っている」と訳してみても、私達は果して何を受取つたらよいのであろうか。中西進氏流に云えば、訳とは我々にとって万葉集への文学ではなかったか。

一般的には卷十四だからといって、卷一から卷二十にかけての解釈の中で、特に変わった訳がなされてくることはない。東歌だけの解釈本にしても、抒情詩解釈法の伝統から外れてしまつてはいない。

だが東歌が民謡であつたら相聞往來の伝統に含まれる心情の対一の対応、或はそうした基礎に立つ解釈、また享受は、そのままでは有り得なくなってくるのではないか。訳者の筆にこめられるイメージ「あなたの手」の「あなた」も、「お前も私も」具体的には存在しない筈ではないか。「あなた」「私」という、伝統が獲得したりアリティは此処では通用しない。質の違ったそれらへ汝、吾、妹Vに対応させる言葉、そんな言葉が東歌を口語訳するための言葉ではなかったか。

ところで東歌は民謡であつたのかどうか。

## 二 東・防二対

詩人は黄金なす麦や稲のうねりしか歌わない。それを土と種子か

ら作り上げた耕作人にはまた違った感慨もあるう。だからそれとこれとは差があるだろうが、万葉集という文学的編集を経て卷十四に位置する東歌は、その生活的特性を序という文学的技巧に残しながら、矢張り万葉文学の制約を受け、名の通り東國の「歌」でしかなかった。その上、猥雑で肯定的なものをすり抜け、それを拒否することに於いてある、ランボウ流に云えば「神の光を発見する」『文学』でもなかった。

東歌も矢張り万葉集中の一巻である。それほど変わった所がある筈はない。今、気づいた東歌、防人歌の二対の歌を上げ、些細な感想を綴ってみよう。

3426 会津嶺の国をさ遠み逢はなはば惚ひにせもと紐結ばさね 東歌  
4420 草枕旅の丸寝の紐絶えば吾が手と著ける此の針持し 防人歌  
前者について例えば略解などには「防人の別の歌なるべし」とある。

3402 日の暮に碓氷の山を越ゆる日は背なのが袖もさやに振らしつ

東歌

4407 ひなくもり碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘れぬかも

防人歌

『万葉集東歌』には「勘国歌にこの標目(防人歌)はないけれども3357 3362 3389 3402 3412 3426 等には防人歌としての可能性が或程度考えられ、3427 となればまずは確実に防人歌である」とある。

即ち右の二対四首はすべて防人歌かともみられているものである。いうまでもなく防人歌ではその製作の事情、時日、作者がわかっている。こうした条件が民謡に対立する条件であるこというまでもない。二対の前者が夫々東歌に入っているのは偶々製作の場や、

時日、作者が忘れられてしまったからなのであろうか。或はそうかも知れない。しかし、その間にこの二者は東歌に入るための条件を獲得している筈である。即ち防人歌の持たない、東歌としての要素をこの二者は持っている筈である。

### 三 紐結ばさね

会津嶺の国をさ遠み逢はなはば偲ひにせもと紐結ばさね

今、この歌を「会津嶺のある国が遠いので逢はないならば偲び種にせんと（思う）紐をお結びなさい」とでも訳してみると―実際にんな風以外に、本文に沿った訳は難しい―この訳をいくらのぞき込んでも焦点は合って来ない。どんな具体的イメージも姿を見せないのである。

一、二句が実質的連用修飾なのか、枕・序といった修辭なのか不明瞭である。一般的には序と考えられ、折口信夫氏は枕としているが結局は「会津嶺の国が」「遠い」という主述の關係でする修辭であろうから、底には「会津嶺の国が遠い」という一般的認識があることに變りはないだろう。この部分だけではとにかく実質的なものとみてよい。

万葉文化の上で、遠いというのは普通には越の国や九州といった、支配・文化の限界を指しているとみられる。七世紀から八世紀にかけての東北征討は出羽、多賀柵方面にみられ、東北における城柵跡の存在も石城、石背には認められない。大化改新辺りの「道奥国」というのは右の石城、石背等の東北南部を指していたらうと高橋富雄氏は『蝦夷』の中でべられてゐる。大化以後の北征の歴史に石城、石背が素通りされ、戦鬪を示す城柵跡も発見されないの

は、この辺りが大和政権にある關係を持っていたからであらうし、当然、比較的早い時期に会津は大和朝廷に服属し、万葉文化圏でもその北限を形成していたのではなかつたらうか。

道の奥の真野の草原『遠けども』という笠女郎の歌は、「遠い」を導く序に「真野の草原」をもって来ている。石城・石背の線が万葉文化圏における「遠い」の認識であつたことを推測させる一助になるかも知れない。

それで会津嶺の国が「遠い」の主語であり得ることが推測出来る訳であるが、その「遠い」ことに対する起点感覚は存在しない。この「遠い」には基準や、はっきりした方角もないのである。そしてこれはこれでよかつたのであろう、或る個体に関わる具体性は不要なのである。

だから当然「逢はないならば」は誰が誰にということはない。勿論、男女の關係には違くないが、それが一對一の具體的關係としては表出されていらないのである。一般的には男から女への歌としてゐるが室伏氏の『万葉東歌』ではこれを女歌としている。次の「偲び種にする」主体はそれによって決まる訳であるが、「国が遠くて」「逢はないならば」も単に一般性を示す以外にないとしたら―事実「逢はなはば」の仮定条件には各注とも大変苦労しているようである―「偲び種にする」という主体を決める必要はないし、そうした努力をこの歌は拒否してゐるのではないか。

従つて「紐結ばさね」の相互關係も必ずしも明瞭ではない。万葉集の他の用例からは、この關係は女から男へであるが、折口氏によれば「紐結び」の習俗は男女相互的なものである。それに「紐結ばさ(す)」は相手への尊敬である。此処は命令形でもないし、その動

作が自己にまで及ぶとは限らない。「ね」は詠え望むものだから、相手がその動作を遂行するように願うもので、必ずしも「結んで下さい」と自己に引きつけなくてもよいだろう。紐を結んでもらう人は二人の間に直接関係のない他人かも知れない。

東歌には実はこれに似た表現が二つある。

筑波嶺の嶺ろに霞居過ぎかてに息づく君を率寝てやらさね

伎波都久の岡の茎葎われ摘めど箆にもたなふ背なと摘まさね

前者について『万葉集』（山本健吉編）には『第三者、たぶん親しい姉分の者か、口利き婆さんが、女に言いかける形になっている。「いねてやらさね」に多分に性的なニュアンスがある。「一抱き抱いて」「一締め締めて」といった直截な表現である』とあり、後者について『万葉集東歌』（田辺幸雄）には「数人の若い女たちが、いそがしい生活の中のわずかな暇を見つけて、足尾山つづきあたりの高からぬ丘に葎を摘みに来ている。短い時間にそうたくさん採れはしない。これを嘆きつつ、第四句までを歌う時、姉分が近づいて来て、第五句を笑いながら歌う」とある。『古典文学大系』でも第三者の出現を云っているが、右二者ではそれを姉分的恋の指導者とのようにしている。

勿論こうした事—例えばニラ摘みの女達が第四句まで歌った時、第三者（姉分的指導者）が来て第五句を歌うなど—有りえた現実ではない。この歌の場は第三者といわれる者達を含んだ集団の場なのである。そこでは誰もニラなど摘んではない。しかしニラを摘むことは誰でも生活である。そうした場で姉分的指導者の指導・要求は、集団の歌謡主体に対して「背な」とおつみなさい、「君を」率寝ておやりなさいと云っているのであって、自分と抒情対象の一

対一の関係を全く要求していないのである。

姉分的指導者（歌いかけをする者）とは歌謡集団の場では「歌上げ」ということになる。掛け合いの歌では「やらさね」と詠えいうのも集団に対してであり、「摘まさね」と詠えいうのも集団に対してである。そして又、そう指導された（歌いかけられた）集団は、それを受け取って集団へと歌いかけるのである。こうした構造に、この△尊敬表現▽がある理由がある。

「紐結ばさね」も又同じである。詠えているのは歌上げである。それを受止めるのは歌謡集団であるが、その集団は同様に集団に歌いかけているのである。「紐結び」の主体は男女の集団である。歌上げはその村落共同体に向かうからこそ、此処でも「紐結ばさね」と△尊敬表現▽を取るのである。歌謡集団を構成する人々は夫々に紐を結んだのであり、結ばれたのである。その経験の集約が再生的にこの掛け合い集団の中に息づいているのである。

云はば民謡であつた。「会津嶺の国が」「遠い」だけでよかつた。何処から何処の方角へ向かつてでもよかつたのである。誰が誰に逢はないかは問題ではない。それは人々の生活経験の中にあつた。「紐をお結びなさいよ」と云われる人々は無数にあつた。そしてその無数の人々が紐を結んでやる相手は、男でも女でも矢張り無数にあつた。

実際一対一の抒情ではこうした表現はとられない。煩をいとわず先の二首を並べてみる。

会津嶺の国をさ遠み逢はなはば偲ひにせもと紐結ばさね

草枕旅の丸寝の紐絶えば吾が手と著ける此の針持し

防人歌とて、全くの一対一の会話、やりとりでないこと既に先人

の指摘の通りである。文学性、集団享受性にまで昇化している。にも不拘、「吾が手と著ける此の針持し」である。一般的には「私の（作者の）手と違って」であるが『私注』には「自分の手で附けるよ」とある。前者の深い感情も捨て難いが、防人歌にはギリギリの実用性がある。自称を対者に付ける仕方は「己」を「ナ」と訓ませる伝統にもあつた。「紐をお結び下さい」（男）に対して「自分でつけるこの針を持って行って」（女）の対応は矢張り不調和である。東歌と防人歌にはこれだけの違い、異質がある。

#### 四 さやに振らしつ

日の暮に碓氷の山を越ゆる日は背なのが袖もさやに振らしつ

ここに於ても「日の暮に」は実質的連用修飾ではあるまい。日の暮に碓氷峠にかかることは日常感覚からは異例である。その異例を持って来て「日の暮に……越ゆる日は」と「は」を使って特に「さやに振らしつ」に対応せしめた訳でもあるまい。昼でさえ暗い碓氷峠の古い細道である。月があつても難渋この上もなかつた筈である。矢張り「日の暮に」は修辭であり、枕詞とみてよいだろう。

それにしても「碓氷の山を越ゆる日」とはどんな意味だろう。折口氏は「碓氷の山を越える（越えた）日には」としている。「越えた」か「越える時」とでもしなければイメージが結集しない句である。しかし越ゆる日は「越えた日」でも「越える時」でもない。一体あの碓氷峠の山中で袖など振ってみたとして外に見える筈のものではない。『新考』では「この日は太陽なり」として「てらしつ」と改めている。田辺氏は「私注の、峠の坂下におこなわれた民謡で、その遊行女婦乃至娘などが、別れて山路にかかる旅人を見送る歌

と取るのがよいであろう」とされる。この「越ゆる日」は散文的に云ってしまえば「越える筈の日」「越えることになる日」なのである。上野から信濃へ、またその逆の旅は限りなくあつた。里で夫や子を見送ることは始終あつた。それは全く日常的なことであつたのである。越えた日でも越える時でもなく矢張り「越える日」なのであろう。一般的には朝なのである。送別という事実を踏まえた民謡であつたろう。「背」には夫だけというより、恋人も子も他の男も女も含まれてよいだろう。送別の「袖振」習俗を底に踏まえた民謡である。「ふらしつ」の△尊敬表現▽がなによりこの歌の集団性を証明しよう。具体的に誰かが越えているのではないがその経験は歌謡集団すべての人のものである。

また此処で二首を上げ比較してみよう。

日の暮に碓氷の山を越ゆる日は背なのが袖もさやに振らしつ

ひなくもり碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘れえぬかも

防人歌では、はっきり枕詞になっている。東歌では不図すると実質的連用修飾ともとられ、生活的な序ともみられるものが此処では文学の技巧となつてしまつていたのである。そして「越ゆる日」の一般性が「越えしだに」と限定されて来ている。「さやに振らしつ」という、碓氷峠では目に見えない、云はば不合理がなくなつて、当事者の「妹が恋しく忘れえぬ」となつてゐる。個人の抒情、疑う余地がない。

#### 五 東歌と防人歌

以上二対四首、共に防人歌かと云はれながら、前二者は東歌となつていて、そうなつてゐるのにはそれだけの理由があつたと考へて

よいだろう。多くが生活に関わる序を有しながらも東歌は限定性を持たない。漠として一般的なのである。その一般性ということと△尊敬表現▽は無関係ではない。前二者も、従来は男(夫)から女(妻)へ、女(妻)から男(夫)への、即ち夫婦間の△尊敬表現▽とも取られていた。相聞抒情詩の受取りはそれでよいのであるが民謡の場合はそうした限定はないとみてよいのではないか。

此処で東歌と防人歌の尊敬表現を総覧し、その特質をみよう。

東歌 (。印は既出)

名詞

- 3350 君がみけしし 3371 足柄の御坂畏み 3480 大君の命畏み 3510 み空ゆく

動詞 尊敬対象

- 3369 あせかまかさむ 子ろ 3457 あをわすらすな 背
- 3388 るねてやらさね 3467 入り来てなさね 背
- 3399 あしふましなむ 背 3469 よしろきまさぬ 背
- 3402 さやにふらしつ 背 3479 あはすがへ 妹
- 3535 ながこころのれ 3484 あすきせさめや 君
- 3426 ひもむすばさね 3495 きみがきまさぬ 君
- 3439 みずをたまへな 妹 3498 きみはわすらす 君
- 3440 いでこたばりに 汝 3521 きまさぬきみを 君
- 3444 せなとつまさね 3535 えますがからに 君
- 3455 きませわがせこ 背 3552 おもほすなもろ

以上にみられるように尊敬対象は君・背・妹・汝・子である。相聞における対応関係に殆ど同一である。入っていない場所も推量で大体は入れることが出来よう。とにかく男女の関係には相違ない。対して防人歌は

対象 尊敬語 謙讓語

父母 4326 百代いでませ 4376 言申さずて

母 4342 いませ母刀自

4326 業ましつしも

夫 4426 いませ我が背な

(防人) 4436 いつ来まさむ

諸々

神 4372 幸くと申す 4391 ぬさ奉り 4424 御坂たばらば

4391 ぬさ奉り

4393 参るてきにしを

4402 ぬさ奉り

4424 御坂たばらば

大君 4389 おふせ賜ほか

のようである。名詞には(大君の)命 4321 4328 4353 4393 4394 4403 4432、御坂 4372 4402 4423

4424、御船 4363、御軍 4370、御楯 4373 がある。名詞の点では東・防共通とみてよい。日常語における文化水準を示すものだろう。動詞では父

母、母、夫、神、大君などに対して敬語表現がある。右の様な使い

方は形式(秩序)尊重的であり、実用的、社会的である。神—大君

—父母—夫—妻という規制的秩序から敬語表現が出ている辺り、敬

語本来の完成がある。防人に立つ夫に対するものが二首あるが、右

の系列の一環であり、規制的なものとみられる。対象は特定であつ

て集団化しない。東歌の無目的、村落共同体的集団尊重とは異なる。

東歌では秩序に従って敬語を使うのではなく、共同体の礼儀とし

て敬語を使うのである。一対一の実用的尊敬ではない。防人歌では

勿論その性質にもよるが尊敬表現の体系がはっきり違ふのである。

男女の関係とは即夫婦の関係である。東歌では夫婦の間柄とは明確に断定出来ない、むしろそうでない男女の関係に尊敬表現がある。

## 六 東歌が民謡であつたら

尊敬表現の在り様から東歌の民謡性をみて来た訳であるが、その民謡集團の在り様はどうであつたらうか。

3425 下毛野安蘇の河原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝が心告れ

この尊敬表現は歌謡集團・歌垣などの場に安蘇の河原を通じて来た者がする「歌上げ」の最初の方の歌であろう。集團に対する挨拶である。隣村から来て参加し、歌うものはこうして自己を紹介し、挨拶するものである。

3382 馬来田の嶺ろの笹葉の露霜のぬれてわきなば汝は恋ふげそも

この歌も歌謡集團への参加の歌ではないかと思はれるが語義不明

## 天若日子神話

——阿遲志貴高日子根神をめぐって——

筆者は「中央大学国文」第一〇号に、「天若日子神話——成立順序・成立過程・資料性——」を発表し、天若彦（記には「日子」とあるが、以下「彦」に統一。）神話の文献批判を行った。其処では、

(一)天若彦神話は、本来は出雲系神話に属さぬ事。(二)皇室側の固有の神話か、或は皇室側と無関係な一個の遊離神話を皇室側が包摂し、自己の側に都合の良い様に改変せしめたものであるかの孰れ

な点があつてはつきりしない。来なばなら最初の、分きなばなら最後の歌であろう。とにかく一對一の吾・汝の抒情ではないだろう。

3526 沼二つ通は鳥がす吾が心ふたゆくなもと汝よもはりそね

3529 とやの野にねらはりをさをさも寝なへ児ゆえに母にころはえ

は「ひ」の延とされているが、東歌が民謡であつたら此処も尊敬表現ではなからうか。

こうして東歌が民謡であつたら「妹が直手よ」は妹への抒情主体の呼びかけではなく、「汝も吾も」は汝と抒情主体我との関係ではない。だが長い伝統を持つ解釈感覚は仲々改らないだろう。東歌に「相聞(往来)」などと分類した張本人は誰あるう、万葉の編者その人であつた。だが聞くがいい、東歌の底からかすかな抵抗の声が絶えず湧きのぼるのを。

## 服部 旦

かである事。(三)より古い伝に立脚して研究する上の資料価値(以下、此の意味で使用)に就いては、記の伝は最優先しない。(四)従つて、記の伝にのみ重点を置くのは、より古い伝に立ち研究する為には不都合である。(五)此の神話の成立の先後関係は、古い順に記せば、(1)紀一書第一、(2)記、(3)紀本文、(4)紀一書第二、(5)出雲國遷却崇神祭祝詞であり、其の資料価値も成立の時期が下るに連れて低くなる。